

近世後期における患者の医師選択

『鈴木平九郎公私日記』を中心に

長田直子

How Did Late Tokugawa Villagers Choose Doctors?

はじめに

- ①鈴木平九郎と『公私日記』
- ②患者から見た医師の存在
- ③江戸の医師への選択
- ④江戸の医師選択の背景
まとめ

【論文要旨】

医師による医療が村でも広まつた近世後期、人々は病に罹つたとき医師をどのように選択したのか。本稿では、都市近郊農村である多摩地域名主の日記鈴木平九郎『公私日記』を取り上げ、近世後期から幕末期にかけての患者側の医師選択について、江戸との関わりを含めて考察を試みた。

近世後期の多摩地域も他地域と同様に多数の医師がいた。幕末期には江戸の蘭学塾で蘭学を学ぶ者も現れていた。そうした状況の中で、鈴木家や鈴木家の親せき達は通常かかりつけとも言うべき医師に頼つていた。かかりつけ医師は、たんに地域的条件のみによらず、親戚関係・文化関係などによって決められていた。しかし、専門性の必要な眼科や外科、また病気の進行状態によって遠くの専門医やかつて江戸で開業していた蘭方医に診療を求めた。ただし、かかりつけ医師の存在は患者にとって大きく、遠方の医師にかかってもその傍らでかかりつけの医師に頼つていた。

さらに、この地域の人々は病が重くなると、江戸という選択肢を選んでいた。彼らが頼る江戸の医師達は蘭学塾の師匠、または藩医や当時外科で名が知られていたトッピクラスの医師達であつた。しかし、それらの医師達でさえ、患者の病状によつては、選択され、江戸を抜けてさらに評判の医師の元に医師替えをされることもあつた。患者側はたんに江戸の医師を求めるのみならず、シビアな判断で医師選択を行える状況になつてゐたのである。多摩地域の患者達が求める江戸の医師達は、蘭方医が多かつた。この背景として、多摩地域と伊東玄朴及び象先堂門人とのつながりが考えられた。また、江戸の人々とのつながり、時期的背景、経済的背景に加えてこの地域が甲州街道沿いかつて都市近郊農村であったことも背景としてあつたとおもわれる。この地域の患者による医師選択には地域的特色があらわれていたのである。